

## Newsletter

March 2018

<http://www.aack.or.jp>

## 目次

京都大学ブータン王国友好 60 周年記念事業  
の概略報告

ブータン王女の来日

松沢哲郎 .....1

ソナム王女歓迎晩餐会

榊原雅晴 .....3

ブータン・京都大学友好 60 周年記念  
シンポジウム

坂本龍太 .....4

第 43 回雲南懇話会 (2017 年 12 月 23 日開催)  
講演概要

山岸久雄 .....7

記録映画「マナスルに立つ」DVD 版発売

.....10

松井千秋さんに日本建築学会大賞と瑞宝中綬章

編集人 .....10

会員動向 .....11

事務局から .....11

原稿募集 .....11

AACK Newsletter 執筆要領 .....12

編集後記 .....12

## 京都大学ブータン王国友好 60 周年記念事業の概略報告

2017 年はブータンと京都大学の友好関係が始まって 60 周年にあたり、その記念事業が実施された。AACK との関わりも深いことなの

で、以下のように概略の報告をお願いした。なお、詳細な報告は「ヒマラヤ学誌」第 19 号に掲載される予定である。

## ブータン王女の来日

松沢哲郎

ブータンのソナム・デチェン・ワンチュク王女が 2017 年 10 月 21 日から 27 日まで来日された。京大とブータンの友好 60 周年を記念する行事として記念シンポジウムを京都大学で開催し、山極壽一総長 (AACK 名誉会員) ほか多数の方々の出席を得た。今回の来日について報告したい。

王女は 1981 年のお生まれなので 36 歳。聡明で美しい方だった。結婚して 2 人の男の子がいる。現在の第 5 代国王の妹にあたる。米国ハーバード大学を卒業して、スタンフォード大学で

法学の修士学位を取得した。王室の一員として国王を補佐し、かつ経歴を活かしてブータンの法曹界の要職にある。弁護士会の総裁で、新設した司法研修所の所長もつとめているという。

来日した 21 日の夜に京都で歓迎の夕べをもった。2017 年に設立された日本ブータン学会の会長である栗田靖之 AACK 会員はじめ、門川大作京都市長、辻卓史在大阪ブータン王国名誉領事、湊長博京大副学長らのご挨拶をいただいた。ブータンにかかわってこられた AACK 会員諸氏に加え、ブータントレッキン



写真1 清風荘にて、右より山極総長、王女、松沢

グ（2015年）をした世代を含め京都大学山岳部の現役諸君もかけつけてくれた。翌22日には、裏千家の千玄室さんに応接いただき、時代祭鑑賞はあいにくの雨で中止になったが烏丸御池の交差点角にある「ひと・健康・未来研究財団」で島岡憲二理事とS&R財団CEOの久能祐子さんと面談した。その嵐の夜に東京へ移動し、23日には日本弁護士連合会の中本和洋会長（京大卒）を表敬した。徳田ひとみブータン王国名誉総領事、堀江正彦京大特定教授らを招いて東京で歓迎の夕べをもった。24日には皇后陛下、皇太子ご一家、秋篠宮ご一家とお会いになった。25日は京都に移動して、清風荘で山極総長主催の昼食会があり、午後には60周年記念シンポジウム並びに歓迎会を開催した。離日直前の26日にはiPS研究所を山中伸弥教授にご案内いただいた。法学部、教育学部、東南アジア研究所、霊長類研究所などブータンと関わる京大各部局との懇談の場をもった。京都造形芸術大学の徳山豊理事長ならびに尾池和夫学長（元京大総長）を表敬した。

ブータンと京都大学とりわけAACKとの縁は深い。1957年秋の桑原武夫・芦田譲治両京大教授による第3代王妃（王女の父方の祖母）の応接に始まった。これが中尾佐助会員による1958年のブータン踏査につながり、彼の教え子である西岡京治氏による多年の農業指導につながった。その後も、1969年の桑原武夫・松尾稔らの隊、1985年の堀了平・栗田靖之・横山宏太郎・人見五郎らに率いられた京大山岳部のマサコン峰初登頂などがある。この間に、笹谷哲也、吉野熙道、松田隆雄、上田豊、市川

光雄、山本清司、田中達吉、米本昌平、河合明宣、福崎賢治、神園泰比古、青木小太郎、竹田晋也、伊藤宏範、中山茂樹、月原敏博、高井正成、岡田忠雄、菅野公一、毛利尚樹の各氏など、京大山岳部やAACKの会員が連綿とブータンとの深いつながりを築いて来られた。

私事ながら、わたしは1969年の入学である。山岳部の3年先輩になる米本昌平さんらがちょうどブータンに行っていたときである。翌1970年には、同期で当時山岳部2回生の河合明宣さんが、先輩の谷泰さんとともにブータンをめざした。高木真一・中尾成邦・福崎賢治など同期生と一緒に羽田空港に河合さんを見送りに行った。その前夜に、高木の東京の実家にみなで泊ったのを懐かしく思い出す。その後、わたし自身、1995年に初めてブータンに行った。そして2010年、2013年とさらに訪れる機会があった。振り返ってみると、大学入学時のブータンとの出会いが深い憧憬を生んだのだと思う。

今回の来日は、AACK前会長の松林公藏さんと、その学問の後継者でAACK会員でもある坂本龍太東南アジア研究所准教授の発案である。60周年事業をするねらいは温故知新にある。AACKの先輩たちが60年かけて築いてきたブータンとの信頼のきずなを、こうした機会に振り返り、京大の次の世代に引き継ぎたい。坂本龍太さんに加え、こころの未来研究センターの熊谷誠慈特定准教授、高等研究院に10月1日付で赴任したばかりの山本真也准教授、ブータンとの深い関わりを築きつつあるこの3人の准教授に、ブータンと京大の友好の後事を託す思いで記念事業の実働を担っていただいた。来日のようすは、京都大学ブータ



写真2 聖護院にある河道屋養老の暖簾をくぐる王女

ン友好プログラムのHP (<https://www.kyoto-bhutan.org/>) ならびに AACK のHP (<http://www.aack.info/>) でリアルタイムに報じた。「ヒマラヤ学誌」19号で詳細を報告する。なお来日にあわせて、京大ブータン友好60周年記念事業における写真展「ブータンの山と文化 The Mountains and Culture of Bhutan」を、10月16日から30日まで、百周年時計台記念館「京大サロン」で開催した。

本事業は、平成29年度総長裁量経費の支援を得て実施されたものである。申請部局である

高等研究院の松井一純事務部長・松永倫紀掛長ならびに事務の方々にたいへんお世話になった。京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の支援室職員の左海陽子さんと秋山未来さんにも王女一行のお世話をいただいた。とくに秋山さんには全行程にわたって王女に付き添っていただいた。紙幅の関係ですべてのお名前はあげられないが、AACK会員はじめ多くの方々のご支援をいただいた。記して感謝したい。

## ソナム王女歓迎晩餐会

榊原雅晴

ソナム王女の歓迎晩餐会は10月21日夕、京都ブライトンホテルで開かれた。超大型の台風21号接近による土砂降りという悪条件にもかかわらず約80人が出席した。当日朝、関西国際空港に到着したばかりの王女は疲れも見せず、終始にこやかに参加者と歓談された。

晩餐会では松沢哲郎・AACK会長が、ブータンと京大との60年に及ぶ友好の歴史を、貴重な映像とともに紹介。王女の祖母であるケサン・ワンチュク第3代王妃が1957年に京都を訪問した際、桑原武夫・京大教授(AACK会員)らと面会したときの記念写真、王妃の招きで1958年、中尾佐助・大阪府立大助教授(AACK会員)が日本人として初めてブータンを調査したときに撮影したティンブーや農村の懐かしい風景などが写し出された。王女の父である第4代国王の、幼いころの姿が登場すると、会場には笑い声が広がった。

ソナム王女は「1200年の歴史と、ユニークな伝統文化を持つ京都を訪れることができ光栄です。京大とブータンの友情がさらに深まることを願います」とあいさつ。湊長博・京大副学長の発声で乾杯し、歓談に移った。

友好の道をひらいた桑原武夫さんの長男文吉さん、ブータンで農業指導に生涯を捧げた西岡京治さんの里子夫人も出席し、王女と歓談した。



京大山岳部の現役部員らと記念撮影に応じるソナム王女

来賓の門川大作・京都市長、辻卓史・在大阪ブータン王国名誉領事も歓迎のスピーチを行った。

また2017年5月に設立されたばかりの「日本ブータン学会」を代表し、栗田靖之さん(AACK会員)が「今日のブータンは国民総幸福量(GNH)、自然生態系への尊重などの思想が世界から尊敬されています。われわれは、ブータンの文化と伝統に敬愛の念をもって研究を行いたい」と、研究の将来に向けた抱負を述べた。

歓迎の夕は和気藹々とした雰囲気続き、現役山岳部員が王女を囲み記念撮影する光景もみられた。

## ブータン・京都大学友好 60 周年記念シンポジウム

坂本龍太



写真 1 学生に拍手を送る王女

2017年10月25日(水曜日)京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホールにて、「ブータン・京都大学友好60周年記念シンポジウム」が開催された。これは、「京都大学ブータン王国友好60周年記念事業」(代表・松沢哲郎、山極壽一総長裁量事業)の一環として、ブータン王国より、ソナム・デチェン・ワンチュク王女、チェンチョ・ドルジ氏、サンゲイ・ドルジ氏、テンジン氏、リンジ・ペム氏の5名をお招きして行われたものである。

まず、5名の方々について紹介したい。ソナム・デチェン・ワンチュク王女は、ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王の妹君である。ブータンで敬愛されている父ジグミ・シンゲ・ワンチュク第4代国王の最大の寵愛を受けるとともに雰囲気や性格、考え方を最も受け継いでいるのではないかと噂されている人物である。スタンフォード大学で国際関係分野の学士号、ハーバード大学法科大学院で修士を取られ、ブータン国立司法研修所とジグメ・シンゲ・ワンチュク法学校の総裁を務めているほか、世界で最も美しい王女の一人として取り上げられることもあり、才色兼備の王女として人々の憧れと尊敬を集めている。チェンチョ・ドルジ氏は、ブータン王立護衛隊の少将である。4代国王と常に行動を共にしている人物である。インド陸軍士官学校での訓練後、1985年からブータン王立護衛隊に配属となって以降4代国王の副

官を務め、1989年2月に4代国王が大喪の礼に参列された際も日本に同行した<sup>1</sup>。サンゲイ・ドルジ氏はジグミ・シンゲ・ワンチュク法学校の学務長である。インドのセント・ステファン大学で名誉文学士、英国のマンチェスター大学で教育学の修士号を取得しており、国立技術訓練機構・王立技術研修所の校長、教育省・試験委員会の次官補、労働省人材局及び労働基準局の局長などを歴任し、2016年5月10日に王女の指名を受け、ジグミ・シンゲ・ワンチュク法学校の学務長となった<sup>2</sup>。テンジン氏はブータン国立司法研修所の陪席判事でソナム・デチェン・ワンチュク王女の秘書官である。インドのハイデラバードにある5年制の国立ロースクールで学士、ジョージワシントン大学法科大学院国際法・比較法分野で修士を取得している。リンジ・ペム氏は、国連ウィメン・ブータン事務所の全ブータン調整官である。ソナム・デチェン・ワンチュク王女の幼馴染であり、王女の母ドルジ・ワンモ第4代王妃がブータンで貧困層など社会的弱者を支援するために創始したタラヤナ財団の理事にも名を連ねている。

シンポジウムは、山極壽一総長による歓迎の言葉に始まり、王女からの基調演説があった。演説の中に次の言葉があった。「日本とブータンは何千マイルも離れていますが、両国の国民の間に長い年月をかけて築き上げられてきた親密な友好関係があるため、いつもとても近く感じます。我々の関係は、共通の精神的遺産、共有する結束の象徴としての君主制への敬意、独自の固有性をもたらす我々の文化や伝統への畏敬の念、他の様々な共有する社会的価値観の上に築き上げられています。ブータンの国民はいつも日本人に対して強い愛情を感じており、いつもあなた方の素晴らしい国の成功を祝福しています。」

続いて、松沢哲郎氏の基調講演が行われた。講演では、1957年の桑原武夫氏らのケサン・ワンチュク第3代王妃接遇、1969年の松尾稔氏らのブータン学術調査隊、1985年の京都大学ブータン・ヒマラヤ学術登山隊のマサ・コン初登頂、2010年の松沢哲郎氏・松林公蔵氏ら

のジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王謁見、京都大学ブータン友好プログラムの活動などへの言及があった。その後、王女よりタンカ、総長より風神雷神図屏風絵の贈呈が行われ、熊谷誠慈氏（京都大学こころの未来研究センター）によるブータンの仏教と国民総幸福に関する発表、西平直氏（京都大学教育学部）によるブータンの若者への教育に関する発表、岡島英明氏（京都大学医学部）によるティンブー国立病院への技術協力に関する発表、と続き、休憩をはさんで、イエゼル氏（ブータン王立大学・シェラブツェカレッジ）、赤松芳郎氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）、安藤和雄氏（京都大学東南アジア地域研究研究所）によるブータン農村の過疎及び離農に関する発表、坂本龍太による地域在住高齢者への医療計画に関する発表が行われた<sup>3-7</sup>。

シンポジウムのおわりには、西本恵子氏（京都大学経営管理大学院）により国際交流科目「ブータン農村に学ぶ発展のあり方」で訪れたブータン王立大学シェラブツェカレッジとの交流の様子が発表された後、同科目でブータンに渡航経験を持つ酒井肇氏、西本恵子氏、犬飼亜実氏、田中咲妃氏、浅井薫氏、高浦雄大氏、横畠尚貴氏、柏木真穂氏、平田二千翔氏、岡和來氏、渡航予定の伊藤愛莉氏、岡田紫苑氏、藤原萌氏によりゾンカ語の歌“ヨンプラ”の披露があった<sup>8-10</sup>。歌はブータンの民族衣装ゴ、キラを着用して行われた。この歌は酒井肇氏（京都大学公共政策大学院）の呼び掛けで学生が練習を積み、行われたものである。会場はゆったりとした調べに包まれ、学生の真摯な姿に釘付けとなった。王女も「とても心を打たれた」と喜ばれていた。

今回の王女一行来日は、毎日新聞の榊原雅晴氏が最初に取り上げていただいた他、ブータン国営放送やブータンで最も広く購読されているクエンセル紙、ジャパントイムズ紙、めざましテレビなどで大きく取り上げられた<sup>11-16</sup>。ブータン、日本、両国の国民がこれらのニュースを介して、60年の友好の歴史に思いをはせたことは、大きな意味があるのでないかと考える。その歴史の中でAACKの方々が果たした役割はご存知のとおりである。1957年の晩秋、ケサン・ワンチュク第3代王妃、王妃の母マユム・チョイン・ワンモ・ドルジ氏、姉タシ・ドルジ



写真2 二条城にて、左からテンジン氏、サンゲイ・ドルジ氏、チェンチョ・ドルジ氏、リンジ・ペム氏

氏、医師のカボ氏が来日され、桑原武夫氏ら京都大学山岳部が中心となり、一行を歓待した。その時の様子を桑原武夫氏は「ブータン横断紀行」（講談社）の中で次のように述べている<sup>17</sup>。「都ホテルのロビーで待っていると、忽然として華麗なチベット服をまとった窈窕たる美女が老婦人とともに現れた。ケサン・ワンチュク殿下とその母君であった。」「最後の日、私はやはり来日中のフランスの哲学者ガブリエル・マルセルの歓迎晩餐会があったのを断って、王妃のお別れパーティに三島亭へ行った。学説は後日、本の中で読むことができるが、ヒマラヤの王族とスキヤキ鍋をつつく機会は今夕しかない。」この時に生まれた友好は、両国の歴史を語る上で欠かすことのできないものとなった。これがもとになり、翌年1958年に当時浪速大学（現在の大阪府立大学）農学部のアシスタント教授であった中尾佐助氏がブータンに渡航、その時に生まれた著書「秘境ブータン」が1960年第8回エッセイスト・クラブ賞を受賞している<sup>18</sup>。また、大学で中尾佐助氏の薫陶を受けた西岡京治氏が1964年コロポ・プランによる海外技術協力事業団（現JICA）の農業専門家としてブータンに派遣され、「ブータン農業の父」と評されたその後の活躍は有名である<sup>19</sup>。そして、国立民族学博物館の栗田靖之氏、名古屋大学の上田豊氏、放送大学の河合明宣氏、福井大学の月原敏博氏などがブータンの民族、氷河、農村開発、地理などの知見を積み上げていった<sup>20-23</sup>。

今回の京都大学ブータン王国友好60周年記念事業の最大の目的は、ブータンとの友好を次

世代につなげることであった。シンポジウムに先んじて京都ブライトンホテルで行われた歓迎会では、桑原武夫氏の御子息である桑原文吉氏や西岡京治氏の奥様であり御自身もブータンに滞在された西岡里子氏のお姿もあった。日本ブータン学会学長を務める栗田靖之氏からは来賓挨拶をいただき、1985年当時京都大学ブータン・ヒマラヤ学術登山隊登攀隊長であった横山宏太郎氏からはマサ・コン峰初登頂に関するコメントもいただいた<sup>24,25</sup>。王女一行やブータンとの友好を築いてきた方々と直に接した若者たち、テレビや新聞で接した若者たち、友人や先輩から話を伝え聞く若者たちが、両国のこれからの友好を創り上げていくことを希望している。

招聘の発端となったのは、AACKの方々とのゆかりが深いローメンツアーズ・アンド・トレックスのカルチュン・ワンチュク氏である。2017年4月には奥様を伴われて来日されました。その際には、福井で月原敏博氏、東京で河合明宣氏、京都で笹谷哲也氏、栗田靖之氏、竹田晋也氏らが接遇にあたり、富永浩三氏には祇園をご案内いただきました。2017年が友好60周年にあたることを知った彼が友人であるブータン政府観光局の局長チミ・ペム氏のもとへ私を連れていき、節目の年に皇室から日本への訪問を行うことの意義をチミ・ペム氏に強く訴えたのである。チミ・ペム氏はその場で協力を約束した。私はこの話をまず恩師である松林公蔵氏と栗田靖之氏に相談した。松林氏は「今京大でそれができるとしたら松沢しかいないでしょ」と話した。そこでカルチュン・ワンチュク氏の助言を京都大学ブータン友好プログラムの責任者である松沢哲郎氏に伝えたところ、松沢氏は「それはぜひやりたい」、「カルチュンにそう伝えて」、「素晴らしい」と即答した。そこから、この計画が大きく前進したのである。栗田靖之氏は2004年10月にソナム・デチェン・ワンチュク王女の母であるドルジ・ワンモ第4代王妃と一緒に来日された際にすでにお会いした経験をお持ちであった。その際の接遇の様子に基づき的確な御助言をいただき、今回の招聘実行委員の間で共有され計画を立てる上で役立つ。竹田晋也氏からは、1958年2月5日付でカリンボン、ブータン・ハウスのジグメ・バルデン・ドルジ元首相から芦田譲治氏に送付された手紙を見せていただいた。そこには、ジ

グメ・ドルジ・ワンチュク第3代国王が中尾佐助氏を招聘することが書かれていた。先方に招聘状を送る際、この貴重な御手紙のコピーを同封させていただいた。他にも河合明宣氏、月原敏博氏をはじめとするたくさんの方々にご相談させていただき、京都大学山岳部の六車光貴氏、森本悠介氏、井ノ上綾音氏には当日会場でお手伝いをいただきました。最後までシンポジウムの詳細連絡が滞り、大変失礼いたしました。その状況の中で多くの方々に参加いただきました。ご協力いただいたすべての方々にごこの誌面をおかりして心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

最後に、2017年12月11日、栗田靖之氏、松林公蔵氏、奥宮清人氏をはじめとするAACKメンバーとも親交が厚いドルジ・ワンチュク氏が奥様とともに交通事故で亡くなりました。ドルジ・ワンチュク氏は保健省の医療サービス局長、公衆衛生局局長を歴任し、事務次官も務めました。我々がブータンにおいて地域在住高齢者に対する医療計画を進める上での最大の協力者であり、野村高史氏が頭部外傷を受傷された際、病院に向かう車内からCTスキャン検査を直ちに施行できるようアレンジしてほしいとお願いした相手でもあります<sup>26</sup>。彼の存在がなければ検査の施行が遅れ、後手に回っていたかもしれません。今回の王女一行の招聘のこともとても喜んでくれていました。忙しい中でも、いつも人懐っこい満面の笑顔で我々を迎え、大きな体で温かく抱きしめてくれたダショー・ドルジ・ワンチュク。そばにいてやさしく微笑んでおられた奥様。お二人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 参考

1. His Majesty promotes two brigadiers. *Bhutan Broadcasting Service* Dec 6, 2014.
2. Jigme Singye Wangchuck School of Law. Senior Administration. <http://www.jswlaw.bt/academics/senior-administration/> Accessed on Dec 25th, 2017.
3. Seiji Kumagai Ed. "Bhutanese Buddhism and its Culture" *Vajra Books*. December, 2014.
4. 熊谷誠慈編。『ブータン—国民の幸せをめざす王国—』創元社。2017年7月。
5. 杉本均編。『ブータン王国の教育変容—近代化と

- 「幸福」のゆくえー』岩波書店. 2016年8月.
6. Yoshio Akamatsu. "Changes of livelihood and its contemporary problems in mountainous villages of eastern Bhutan" Rubi Enterprise. March, 2016.
  7. 坂本龍太著. 『ブータンの小さな診療所』ナカニシヤ出版. 2014年12月.
  8. 安藤和雄、坂本龍太、石本恭子、谷悠一郎、木下廣大、高島菜芭、高浜拓也、福田睦、宮本明德、諏訪雄一、長澤勇貴、森田椋夜、柳原志穂、酒井肇. 相互啓発実践型地域研究としての京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」現地スタディー・ツアー報告. ヒマラヤ学誌 2015; 16: 42-65.
  9. 安藤和雄、西本恵子、出屋敷綾音、福嶋千紘、犬飼亜実、田中咲妃、新川広樹、横島尚貴、高浦雄大、浅井薫、吉野月華、坂本龍太. 実践哲学を基礎とした東ブータンにおける相互啓発実践型地域研究の試み—京都大学国際交流科目「ブータンの農村に学ぶ発展の在り方」現地スタディー・ツアー 2015年度報告集—. ヒマラヤ学誌 2016; 17: 39-76.
  10. Misty Terrace. Youngphula.  
<https://mistyterrace.wordpress.com/lyrics/youngphula/> Accessed Dec 26th, 2017.
  11. 榊原雅晴. 京都大が国王の妹を招待 交流60周年を記念. 毎日新聞 2017年10月17日.
  12. 榊原雅晴. 「日本に親近感」京大と交流60周年シンポ. 毎日新聞 2017年10月27日.
  13. Staff Reporter. HRH graces Memorial Symposium in Kyoto. KUENSEL October 28th, 2017.
  14. HRH Princess Sonam Dechan Wangchuck graces Bhutan-Kyoto University 60th Anniversary Memorial Symposium. Bhutan Broadcasting Service October 27th, 2017.
  15. An imperial invitation. The Japan Times October 25th, 2017.
  16. ブータン王女が京大生と交流. めざましテレビ. 2017年10月26日放送 7時8~10分 フジテレビ
  17. 桑原武夫編. 『ブータン横断紀行』講談社. 1976年6月.
  18. 中尾佐助著. 『秘境ブータン』毎日新聞社. 1959年11月.
  19. 西岡京治、西岡里子著. 『ブータン神秘の王国』NTT出版. 1998年11月.
  20. 栗田靖之. ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性. 国立民族学博物館研究報告 1986; 11: 457-488.
  21. Ageta Y, Iwata S, Yabuki H, Naito N, Sakai A, Narama C, Karma. Expansion of glacier lakes in recent decades in the Bhutan Himalayas. *Debris-Covered Glaciers* (Proceedings of a workshop held at Seattle, Washington, USA, September 2000) *IAHS* 2000; 264: 165-175.
  22. 河合明宣. ブータンの地方制度と開発の課題. ヒマラヤ学誌 1994; 5: 149-158.
  23. 月原敏博. ブータン・ヒマラヤにおける生業様式の垂直構造. ヒマラヤ学誌 1992; 3: 133-176.
  24. 京都大学山岳部. 報告 第17号 1983~1985年ブータン・ヒマラヤ登山特集. 1994年10月.
  25. 堀了平編著. 『偉大なる獅子マサコン峰登頂』講談社. 1986年12月.
  26. 坂本龍太、奥宮清人、松林公蔵. 2011年8月のブータン王国からの来賓招聘—ドルジ・ワンチュク氏事務次官就任に寄せて—. ヒマラヤ学誌 2017; 16; 20-27.

## 第43回雲南懇話会 (2017年12月23日開催) 講演概要

山岸久雄



第43回雲南懇話会は2017年12月23日(土)、東京都新宿区市ヶ谷のJICA 研究所国際会議場で開催され、124名の方に参加いただきました。以下、講演の概要を紹介いたします(概要に添えられた会場風景は金井義介氏撮影)。

## ①モンsoon・ヒマラヤに花を求めて —ブータン・ネパール紀行—

青いケシ研究会、JAC アルパインフォトクラブ、  
カワカブ会 松永秀和

講演者は2013年、青いケシ研究会の四川省西部の花探索に参加して以来、毎年、中国やインドへ出かけ、4000mを超す高地で大柄の花をつける青いケシ（メコノプシス属）を探索している。昨年は日本・ブータン友好30周年を機会にブータン北西部で、本年はネパール中部で、それぞれ探索を行った。青いケシは約80種あるが、その半数は横断山脈北側の四川省と東側の雲南省に、残る半数はヒマラヤ山脈の南側（チベットの一部を含む）に生息すると言われている。monsoon時のヒマラヤはヤマビルだけでなく、豪雨による洪水の危険もあり、苦しいトレッキングを強いられるが、可憐な花々に出会う喜びは大きい。

本講演では青いケシを中心に、山麓から3000mまでの低山域に生息する花々、温室構造をもつ植物など、ヒマラヤの南北で命を繋ぐ多数の植物が紹介された。メコノプシス属には青以外に黄色やピンク、ワインレッドの花もある。チョモラリなどの山々の写真とともに、その美しい姿が映写された。青いケシの仲間には、ケシ科の外、ケマンソウ亜科にも青い花があるそうである。たくさん写真の中に、青いケシと青空を一緒に写した写真があった。たしかに青空のように青いケシであった。

## ②ブータン王国の諸言語について —言語多様性の現状と課題—

東北大学 高度教養教育・学生支援機構  
准教授（言語学） 西田文信

世界には約7000の言語があり、その内、文字をもつ言語は約350。その言語を話す人口が5000万人以上の言語は23ある（ちなみに、話す人口が多い順位でいうと、日本語は第9位とのこと）。言語学では、生物学のように言語を分類し、系統を調べる研究方法が発達しているが、実は言語学の方が歴史が古く、生物学の分類は言語学に倣ったそうである。このような前置きの後、ブータン王国諸言語の現状が語られた。

講演者が研究対象とするシナーチベット語族の内、チベット＝ビルマ語系の言語は約400

あり、その内の20以上が九州ほどの広さのブータン王国で話されている。英語と並び公用語となっているのはゾンカ語であるが、ツァンラ語、ネパール語も同等に広く話されており、いずれも10数万人の話者人口をもつ。一方、それ以外の諸言語を話す人口は数百人から数万人に留まり、その実態は殆ど未解明である。

言語の多様性は人類が共有する文化的財産であるが、これらの言語の多くは今、急速に消滅に向かう「危機言語」となっている。生きた言語を有効に研究できる期間はごく限られている。講演者は遅きに失することが無いよう、できるだけ多くの言語を対象に、言語学の手法を駆使したフィールドワークにより、これらの言語の記述（音韻・形態・統語）と歴史研究（主に音韻変化）を行っている。

ブータンでは狭い地域に多数の言語が存在するというが、これは方言とどう違うのか？という質問があった。2つの言語の間に、対応関係がある言葉がどのくらいの割合で見つかるか、などの分析により独立した言語か、方言か、区別されるという。一方、独立言語として扱われるには、政治的な理由もあるらしい。方言に近い言語が、互いに独立した国家で話されているため、別な言語とされる場合もあるようだ。

## ③ロヒンギャ問題はなぜ解決が難しいのか —その歴史的背景について考える—

上智大学総合グローバル学部教授  
根本 敬

ロヒンギャはミャンマーのラカイン州に住むムスリムの人々で、インドのベンガル地方（バングラディッシュ）を出自とし、ベンガル語チッタゴン方言のひとつ、ロヒンギャ語を話す。2017年8月、60数万人のロヒンギャがバングラディッシュへ難民となって流出し、深刻な問題となっている。しかし、この難民流出は昨今生じたものではなく、1970年代後半以降、3度起きており、彼らは長期にわたり国家により抑圧されてきた。

講演者はロヒンギャ問題の歴史的・政治的背景を紐解き、なぜビルマは政府・軍・国民一体となって彼らを排斥するのか解説した。ラカイン地方には昔、アラカン王国があり、15世紀以降ムスリムの人々が居住していた。1826年～1941年、ラカイン地方は英領化され従来の



国境が消えたため、インドのベンガル地方からムスリムの人々が流入し定住するようになった。その後、第2次世界大戦後の混乱期にも流入があった。1950年代にはロヒンギャ語による国営放送が隔週で許されるなど、ロヒンギャが一定程度、国民として認知された時期があった。しかし、1971年に第3次インド・パキスタン戦争が起こり、バングラディシュから難民が流入し、多くは定住したが、バングラディシュとの往来も比較的自由に行った。このことが、ミャンマー国民にロヒンギャ＝違法ベンガル移民のイメージを決定づけ、その後の排斥につながった。

2016年4月に国家顧問（大統領より上の立場）に就任したアウンサンスーチー氏はロヒンギャ問題の深刻さを認め、アナン元国連事務総長を委員長とするラカイン問題調査委員会を発足させ、問題解決に向けた答申を2017年8月に公表したが、公表の翌日、アラカン・ロヒンギャ救世軍（ARSA）の軍施設襲撃が起き、それに対する軍の激しい報復、住民の大量難民流出へとつながり、せつかくの答申を活かしにくい状況になっている。

ロヒンギャを排斥しようとする軍、国民の壁を前に、スーチー氏は非常に難しいかじ取りを強いられながらも、短期的には難民の安全な帰還、中長期的にはアナン委員会答申に沿って、ロヒンギャ問題解決に取り組む姿勢を抱いている。国際社会はスーチー氏に対し、非難ではなく、バックアップすることが求められていると指摘した。

#### ④ヒマラヤの高峰登山

##### — 20 数回に及ぶ 8000m 峰への登高行—

登山家、高峰ガイド、

日本勤労者山岳連盟名誉会員、

日本山岳協会国際委員、Snow Leopard award

受賞者、8000m 峰 9 座登頂者

近藤和美

講演者は第40回懇話会（シルクロードゆかりの地域特集）で主にパミール・天山での登頂の様子について講演されたが、ヒマラヤ 8000m 峰については言及する時間が無かった。そこで今回の講演では、自身が登頂した 8000m 峰に的を絞り、現場で撮影した貴重な写真をもとに、じっくりとヒマラヤ高峰登山について語ってい

ただくことになった。

講演者は1992年、50歳にして初の8000m 峰チョーオユーを無酸素で登頂して以来、26年間で22回、8000m 峰に挑んだ。最初のチョーオユーを除き、全ての隊で隊長を務め、自身も9座に延べ10回登頂した。61歳の時に登頂したガッシャーブルム2峰は8000m 峰無酸素登頂の日本人最高齢記録であり、未だ更新されていないという。これら数々の8000m 峰登山の様子が、順を追って見事な写真で紹介された。その現場に行かない限り、撮影できない写真がたくさん映写され、8000m 峰の世界を垣間見る思いであった。写真枚数が多いため、講演者はスライドが30秒毎に自動更新される設定で話されたが、思い入れのある写真のところで、話し足りない様子が伺われ、申し訳ない気がした。

今年76歳を迎える講演者の最近の登山については、近年の労働情勢により長期日数を要する超高峰への同行者が得難くなり、自身の体力低下も相俟って、8000m 峰への挑戦は難しくなっている。しかし、夢は持ち続けたいとのこと。2017年はヤラ・ピーク（5520m、ネパール）南東面で順応登山の後、スパンティーク（7027m、パキスタン）を単独で目指した。想定を超える悪天候続きのため6000m で撤退されたが、今もなお意気軒高である。

超人的な山歴を持つ講演者の体力、技術、判断力の成長曲線はどのようなものであったか？との問いに対し、体力のピークは誰しも20歳代だろうが、体力の衰えを技術がカバーしてくれる面がある。そのため55歳までは若い者に後れをとると感じることはなかった。技術は難しい登山経験を積みば向上するが、体力が衰えると技術レベルを維持できなくなる。体力と技術はお互いに関係し合っている。判断力については（経験とともに向上するとは限らない）、常にヒマラヤに行き続けているため、正しい判断力が維持できている。山行にブランクがあれば、判断力は低下するだろう。高峰登山では判断力というよりも、決断力が求められている…と語られた。

#### 第44回雲南懇話会のご案内

第44回雲南懇話会を以下のとおり開催致します。

1. 日時：2018年4月21日（土）13時00分～17時00分。その後、茶話会。
2. 場所：「京都アカデミアフォーラム」in 丸の内（東京都千代田区丸の内）
3. 懇話会の内容
  - ①トピック「京でも見えたオーロラ ―明和7年の巨大磁気嵐―」  
国立極地研究所名誉教授、AACK 山岸 久雄
  - ②「ヒマラヤ氷河研究最前線 ―2009年のヒマ

- ラヤ氷河スキャンダルとその後の展開―」  
名古屋大学大学院 環境学研究科准教授、  
笹ヶ峰会 藤田 耕史
- ③「尾瀬とともに50余年 ―札幌、京都を結んで―」  
尾瀬沼畔 長蔵小屋三代目 平野 紀子
  - ④「通える夢は崑崙の 高嶺の彼方ゴビの原  
―李陵説話と西域慕情―」  
京都大学名誉教授（中国法制史） 富谷 至

## 記録映画「マナスルに立つ」DVD版発売

1956年5月、日本人として初めてヒマラヤの8000メートル峰に初登頂した日本山岳会マナスル登山隊の活動を描いた記録映画「マナスルに立つ」（山本嘉次郎監督、97分）のDVDが発売されました。映画は全国で劇場公開され大ヒットしたほか、地方の公民館などで上映され、戦後の日本人を勇気付けました。しかし60年たってフィルム劣化が激しく、貴重な映像が永久に失われる恐れがありました。このため登頂60周年の一昨年、フィルムの傷やほこりを取り除き、色補正をしてデジタル化しました。鮮やかな色彩がよみがえった映像は京大時計台ホールで記念上映され、AACK会員だけでなく、一般市民も含め約500人が鑑賞しました。

初登頂したAACK会員・今西寿雄さんの長男邦夫さん（在大阪ネパール名誉領事、今西組社長）が、フィルムの修復やデジタル化に協力してくださいました。その結果、2700円（税込み）プラス送料300円と価格を抑えることができました。



今西邦夫さんは京大での上映会で「山の上から『おい、何とかせえ!』と親父の声が聞こえた気がします」とあいさつされました。山上の声で、貴重な映像記録を後世に残すことができました。毎日映画社のHP (<http://www.mainichieiga.co.jp>) で購入できます。

（榎原雅晴）

## 松井千秋さんに日本建築学会大賞と瑞宝中綬章

松井千秋会員（九州大学名誉教授）が、2017年日本建築学会大賞を受賞されました。受賞の理由は、「鉄骨構造および合成構造に関する研究と発展に対する功績」です。また、2017年春の叙勲で、教育研究功勞により瑞宝中綬章を受章されました。たいへんおめでとうございます。

日本建築学会のウェブサイトには、受賞にかかる略歴・業績の紹介と、記念インタビューの動画があります。

<https://www.aij.or.jp/2017/2017prize.html>

（編集人 横山宏太郎）

## 会員動向

### 事務局から

2018年度一般社団法人京都大学学士山岳会総会は、2018年5月26日（土）に開催の予定です。詳細につきましては、後日改めてご案内致します。

### 原稿募集

#### 笹ヶ峰ヒュッテについて

第83号でもお知らせしたとおり、昭和3年（1928年）の完成から90年目になる笹ヶ峰ヒュッテについての原稿を募集しております。皆様、どうぞご寄稿をお願いいたします。

なお、ヒュッテの沿革は、AACKウェブサイトにあります。

<https://www.aack.info/ja/sasagamine/history/>

編集人 横山宏太郎

# AACK Newsletter 執筆要領

2018年2月

## 1. 体裁

B5判、縦置き、横書き、21字×46行の2段組です。

したがって本文のみの場合は、刷り上り1ページは1800文字程度となりますが、表題・著者名などが入りますので、およその目安としてA4判の文書1枚が1ページ程度となります。

## 2. 原稿作成

本文は、写真や図とは別に、一般的な横書き文書の形式で作成してください。

ワードプロセッサを用いて作成し、電子メールに添付してお送りいただくのが便利ですが、手書き原稿など紙媒体の原稿でも結構です。

原稿の字数・行数は特に指定しません。印刷時の形式に合わせる必要はありません。手書きの場合は市販の原稿用紙などをご利用ください。

写真、図などの説明は、本文の後に、まとめて付けてください。

## 3. 写真・図

写真や図を掲載できます。印刷ではモノクロですが、AACKウェブサイトには、カラーで掲載されます。

写真や図の原稿は、本文に貼り込まずに、別ファイル、あるいは別紙としてください。

これらもなるべく磁気ファイルでいただくのが便利ですが、紙媒体でも結構です。

磁気ファイルの場合は縮小せず、原本のままでお送りください。印刷の仕上がりをなるべくよい状態にするためご協力ください。

もしファイルが非常に大きく、電子メール添付では送れない場合は、CD-ROM等の媒体で郵送するか、ファイル転送サービスなどをご利用ください。

## 4. 校正

初校は著者に校正をお願いします。通常は、電子メールで校正刷りのPDFをお送りします。修正点は、わかりやすい指示をお願いします。第二校以後は、必要に応じて著者に連絡します。ご協力をお願いいたします。

## 5. 原稿送り先：編集人 横山宏太郎

## 編集後記

この冬は寒さと大雪で、苦勞された地域が多かったようです。高田（上越市）の積雪深は平年を少し越えたくらいですが、除雪にはかなり労力を使いました。このごろは気温の高い日も多くなってきましたが、そうなるに融雪と雨に伴う災害への注意が必要です。

原稿をお寄せいただいた皆様、ありがとうございました。発行が遅れ、次号締め切りまで1ヶ月位ですが、ヒュッテのことははじめ、ぜひ原稿をお願いします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2018年4月16日

原稿送り先：横山宏太郎

〒943-0832 上越市本町2-1-12-801

メールアドレス：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp

発行日 2018年3月15日

発行者 京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎

発行所 〒606-8501

京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究  
研究科 竹田晋也 気付

編集人 横山宏太郎

製作 京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所